春風秋雨相

江利川毅 県立大理事長

石牟礼道子さんを思う

心魂の書「苦海浄土」

今月10日、石牟礼(いしむれ)道子さんの逝去が新聞で報じられた。水俣病患者の世界を描いた「苦海浄土」の著者である。

昭和43(1968)年、私は大学3年生だったが、園田直厚生大臣が水俣病の原因はチッソ水俣工場の排水であることを認めた。現地熊本の病院の話やマスコミの論調からは至極当然と思われる結論であるが、経済成長重視の空気の中で、原因物質の特定など工場排水との因果関係を巡る議論に時間を要し、政府の判断はなかなか下らなかった。園田厚生大臣は熊本出身なので現地の事情に詳しかったのかもしれないが、政治力のある大臣の強い決断であったという印象が残っている。

■公害解決が動機

その頃には公害問題が大きな社会問題になってきており、各地の工業地帯で水質汚濁や大気汚染が周辺に住む人たちの生活に大きな影を落としつつあった。公害問題の解決に関わりたい、私はそう思って厚生省に入ることにした。まだ環境庁ができる前で、厚生省の公害部が公害問題を担当していた。

入省2年目に、本邦初の産業廃棄物の規制を担当することとなった。事業官庁との交渉の理論武装のためにも、公害に関する本をかなり読んだ。当時の本が自宅の本棚に並んでいるが、その中の一つが「苦海浄土」である。私は水俣病問題に関わる仕事はしていないが、悲惨な公害問題の真実・本音を記録した本として、公害を論するときの基本に置くべきものと思っている。

水俣病とは、熊本県水俣市にあるチッソ水俣工場からの工場排水に含まれていたメチル水銀が魚介類の食物連鎖によって生物濃縮し、それを摂取した住民に見られた「メチル水銀中毒症」である。昭和20年代後半には猫や鳥の不審死が多発し、特異な神経症状を呈していた人も出ていたという。昭和34年には熊本大学や厚生省食品衛生調査会が有機水銀説を出したという。

■つらい本音

それなのに、厚生大臣の正式認定発言まで、さらに10年近くかかっており、この間の経緯は誠に残念でならない。

水俣病は、四日市ぜんそく等と並んで四大公害病の一つと言われているが、そう呼ぶことに私はずっと疑問を感じている。多数の工場のばい煙による被害なら公害という言い方も分かるが、一企業の工業排水による被害はその企業の責任である。公害というと責任が拡散されてしまうようで違和感がある。

「苦海浄土」は、水俣病患者や家族、その周辺の人たちから聞いたことを、その人たちに代わって書き記したものである。当事者は病苦でのつらい思いを抱えつつ、戦後の復興プロセスにある地域の大企業に勤める人たちへの配慮もしている。つらい本音や屈折した思いが綴られている。

■心を継承

あとがきには著者の厳しい心情がつづられている。政府見解が出された後も補償交渉にゼロ回答だった企業の態度を厳しく批判し、そして死につつある患者の声を紹介している。「銭は一銭もいらん。そのかわり、会社のえらか衆の、上から順々に、水銀母液ば飲んでもらおう」

新聞によると、石牟礼さんは苦海浄土三部作に続けて、次を書こうと思っていたそうである。心魂はまだ水俣の地に残っているのかもしれない。安らかにお眠りくださいと私は言わない。同じことはできないけど、その心を少しでも引き継いで、例えば振り込め詐欺や悪質な老人住宅のような非人道的事件の撲滅なども含め、世の中が少しでも良くなるよう努力したいと思う。

(次回は3月19日付)